



立野木材工芸が新たに開発したオリジナルブランド「BENCA(ベンカ)」

# お客様の家族に なれるようなものづくり

立野木材工芸(株)  
代表取締役社長 立野 治美 さん

## 女性目線のものづくり

立野木材工芸に入社してから、どんなものづくりをしたいか、と考えた時、思い描いたものが、立野さんのものづくりの始まり。

「自分たち世代が欲しいものを考えて、いまの暮らしに合った家具を作りたい、と思ったのが始まりですね」

二〇一五年一月に発表した新ブランド「BENCA(ベンカ)」は、入社後に様々な仕事をしていくなかで得た、ひとつのご縁がきっかけだったとのこと。「一緒になにかやってみると楽しいかもよ」とデザイナーのお二人を紹介され、最初から「やってみよう」と前向きなお二人と、そういう方と出会いたいと思っ

ていた立野さんによって、新しい試みがスタートしたそうです。

「お客様のご意見を聞きながら何を作るか、それをもとに開発を進めようと思っても、工場を構えつつ考えると、どうしても作る側の頭が強くなりがちになる。工場の設備で出来る可能性のなかからデザインするのはなく、そこを一度取っ払って作り込んでいくという作業はやっぱり難しい。そういった限界を感じていたので、デザイナーとご縁を頂けたことは、本当に有難いお話でした」

女性目線で開発をしているBENCAのデザイナーさんは、なんとお二人とも男性！そしてカタログやウェブサイトのイラストを担当されてい





伝統工芸品である  
小石原焼のツمامミ



長野石を使用したオープンシェルフ

る方も男性とのことでした。  
「今回デザイナーやイラストレーターの方たちと接して、男性って本当に細やかな仕事を突き詰めてやられるんだなって、改めてすごいなって思いました」  
お互い真剣にものづくりをしているので、時には議論も白熱すること。  
「とりあえず形にしようとか、展示会に合わせて発信することが目標ではなく、出来ない時は出来ないで一度下げる。このアイテムが本当に価値あるものにするために、一回でも二回でも、立ち止まって見

直していいじゃないかって、はつきり言われますね」  
ミリ単位のこだわりなどの試行錯誤を経て、お披露目出来たのが去年の一月。いまは自分たちの世界観を伝えられるよう、カタログや展示会場のディスプレイを一生懸命やっていますとのことです。  
**共感をもってチャレンジしていく**  
細部にまでこだわりの詰まったBENCAですが、やはり素材にもこだわった商品になるのでしょうか。  
「いまは主流になっていない材木を使うことははずさず、そこから波及していくチャレンジ的な部分はこれからだと思っています。素材で楽しむのは木だけじゃなくて、BENCAのなかでいえば、伝統工芸品である小石原焼をツمامミに取り入れたものとか、八女の石灯籠に使われている長野石を使ったものとか。異素材にもチャレンジしていくってというのは、常々視野にいられています」  
他にも博多織とのコラボレーションにも取り組まれている立野さんだからその考えを聞かせていただきました。  
「そこにある価値や歴史、意味を理解したうえで、発注する側ではなく、自分たちも一緒に仕事をさせて頂くって

う感覚を忘れずにやっていきたいです。チャレンジしていくことなので、共感を持ってやっていかないと」  
お互いが同じ感覚で、同じだけ労力をかけてやっていくなか、逆にパワーを頂くことも少なくないとのことでした。  
「皆さん前向きで、ちょっと挫けそうになっても『出来まっす』って言って頂けて。頂く力があって、知恵があつて、形に出来る」  
試行錯誤を繰り返すなかで、職人ならではの技を目の当たりにすることもあつたそうです。  
「職人ならではのものが、大川にもいっぱいあるはずなんですよね。自分の会社にも、この人しか出来ないって加工とか技術があるんですよ。そういうのはちゃんと続けなきゃなって思いますが、同時に危機感もいっぱいあるんですよ。次の世代に承継していくにも、次の世代が減っている現状も大川全体にあると思うので。いかにインテリア、家具を魅力的に見せていくか、伝えていくかが大事ですよ」  
**夢を持って集まれる街に**  
「自分のものを揃える時と同じように、家具もひとつお気に入りを見つけて、一個ずつ揃えていく楽しみを持って



ただけならなくて」  
お客様の「本当の」お気に入りのものを作る。大事に長く使って頂きたい、使いたって思ってくださいる方いっぱいたりな家具を届けるといいうのも役目のひとつだと思われているとのこと。そして長く使うなかで、家族のような存在の家具を作っていきたいとのことでした。  
「大川で婚嫁家具を買ったんですって方が、今度は娘が新築するからねって買っていつてくれると嬉しいですね。世代が変わっても、同じく大川でご縁を頂くように。そうやってご縁を頂くことがずっと続くように。自分たちだけじゃなくて、大川という街が、



そうやっていけるように頑張りたいです。欲を言うと、もっと大川全体で出していく力が強くなったらいいなって思いますが、日本一って謳って全然恥じないですし、大川の力をもっとみんなが発揮していけるようになってほしいなと思います。それから、この街でしか出来ないものづくりに興味を持って、大川で働きたいという夢を持った人が集まるような、そんな街にしたいです。学校で学ぶこと、現場で学ぶこと、職人さんから学ぶことは絶対違うので。そういうものがなくなる前に、育てていけるようになっていってほしいなです」